ビハーラ秋田の活動の展開と今後の課題

ビハーラ秋田代表・宝昌寺住職　新川 泰道

一、ビハーラ（Vihara）とは

ビハーラ秋田は、超宗派の僧侶、医療・福祉関係者や一般の方々で構成され、秋田県北部にてささやかながら活動しているグループである。ビハーラとはご承知の通り、サンスクリット語で「安らぎ、息抜き、休養」を意味し、転じて「寺院」を指す。アジア各国や我が国でも古来より、寺院が病院や高齢者施設、薬局などの役目を果たしていた時代があった。

キリスト教由来の語である「ホスピス」に対して、仏教の思想や文化を背景とした終末期医療に関わる施設や団体、活動を指す語として「ビハーラ」を提唱された田宮仁先生の承諾を得て、秋田に於いてもその名称を冠した団体として、当会は平成四年に結成した。秋田の地ならではの地域に根ざしたかたちで、終末期医療を中心に現実的な「いのち」の問題について仏教をベースに考え、実践しようとの趣旨で活動を行っている。

二、活動の内容と展開

結成当初は「ビハーラセミナー」と称しての学習会が中心で、終末期医療への理解と参究を深め、また関連するテーマとしてグリーフケアや高齢者福祉、自殺（秋田県は二十年以上「自殺率全国一」を記録）、脳死・臓器移植等

について、医療・福祉関係者、大学教授や学識経験者、がんや臓器移植の経験者などを講師としてこれまで約百回のセミナーを行ってきた。著名な方々（鎌田實先生や玄侑宗久師、上田紀行氏等）をお招きし、「ビハーラ公開講座」もほぼ隔年のペースで開催している。

平成九年より高齢者施設での慰問活動を開始、一般的に僧侶の存在は「エンギでもない」「まだお呼びは早い」といった雰囲気も根強く、入所者に抵抗感を抱かれるのでは、という遠慮・気兼ねもあった。元気な頃は仏壇やお墓参りを懇ろにされる信心深い方も多く、入所後はそれらができなくなって「ご先祖さまに申し訳ない」という思いを抱えていた方も度々見受けられ、当初の予想以上に歓迎された。「今日はお坊さんが来る日だから」と普段より化粧や衣服に気を配る入所者もいるとの声を聞き、適度なメリハリにもなっているといった効果もあり、施設の理解も得ながら活動を継続している。

「ビハーラ Café」の様子（平成 23 年 10 月 26 日撮影）

その後に開始した緩和ケア病棟での慰問活動は、更にデリケートな場である。今日お会いできた患者さんが次回も会えるとは限らない。経典や禅語の一節についての質問も、何気ない口調の中に切実さを感じることも度々である。病の最中にあり、死を間近にされた方の声を耳にして無力感に苛まれることも多い。いざターミナルの場になってから、宗教的ケアで心の安らぎを…といっても一朝一夕にできることではなく、若い頃、健康な時から仏教・僧侶との距離感を縮めなければ、宗教的ケアの余地は生まれないことも痛感する。

活動の背景となる仏教の思想、特に「生老病死」について仏教では如何に考えるのかを平時から敷衍することがビハーラ活動には重要ではないかという観点から、あるいは「もっと気軽に仏教の話を聞きたい」という声に応える形で、喫茶店などを会場として「ビハーラCafé」と称した企画も開催している。また「がん患者と家族のサロン」を実施、病院外での終末期医療との接点を探り、家族の情報交換や息抜きの場の提供を心がけている。

三、東日本大震災での活動

自然災害や被災地との関わりも「いのち」の問題として、重要な課題と捉えている。被災地支援バザー（阪神淡路大震災など）、被災地での現地活動（平成十九年の北秋田水害）なども行ってきた。

この度の東日本大震災においても、同じ東北で起こった未曾有の大災害として、微力ながら支援活動に関わらせていただいた。発災直後の三月から岩手県沿岸部への救援物資搬送に始まり、足湯サービス、がれき撤去、避難所や仮設住宅での「サロン」、各種激励イベントや相談会の開催、追悼行事への参加などの活動を行った。がれき撤去のボランティアでも、活動開始前に現地のお寺で犠牲者への慰霊供養のひと時を設けたことで、他団体の活動に参加された方からも「有意義な機会だった」との声が寄せられた。仮設住宅に入居間もない時期のサロンでは、現地の住民同士が支え合う新たなコミュニティ作りを目指し、仮設住宅の「表札作り」なども実施、これらは仮設住宅での孤独死や自死の予防も意識した活動である。

被災者との会話では、家族が目の前で津波に呑まれた、家が全壊し思い出の品も全て失った等、言葉の詰まる場面も多い。震災で亡くなった家族の葬儀について、また仏壇や位牌、お墓が流されたといった宗教的な課題も山積する。今回の震災では、お寺が避難所や遺体の仮安置所、支援活動の拠点となり、地元僧侶達の尽力と現地の住民との関係性も特筆すべきである。我々は黒子として、そうした地元のお寺を支えることも十分に配慮してきたつもりであ

る。当会ではそれに加え医療・福祉関係者、また女性をも含めたメンバー構成という特色も生かせるよう、サロン開催の折には血圧測定や健康相談、和裁などを取り入れた支援メニューを心がけてきた。

がれき撤去ボランティアの後、陸前高田ボランティアセンターにて
（平成23年5月31日）

また福島の子供達を招いての保養プログラムを白神山地で開催、「福島では深呼吸するのも怖い」との声を聞いていたが、白神山地のブナ林で「久しぶりに思いっきり息を吸った」との言葉が、印象的かつ切ない思いにさせられた。関連して原発事故による避難者の現状に関する学習会も行っている。上記の活動に際して、チャリティTシャツを企画販売し、約五千枚を全国各地の方々よりご購入いただき、収益を仮設住宅の備品や震災遺児の奨学金、SVA移動図書館活動への支援などに充てさせていただいている。

東北の被災地は高齢化・過疎化が進み、将来は医療や福祉に過度な期待はできない中で、住民同士の支え合いによる心身の健康を保つための仕組み作りが問われている。支援する側・される側の枠を超えて私達も共に学ぶべき課題であり、今後も継続的な関わりが重要と考えている。

本年の公開講座では、東日本大震災の被災地で保健師の活動を記録したドキュメンタリー「一〇〇〇年後の未来へ―3・11保健師たちの証言―」上映と、その映画の中でも中心的な存在の鈴木るり子氏（元・大槌町保健師、岩手看護短期大学教授）の講演を行った。被災地のこれまでと現状、また自分たちの地域との課題を重ね合わせて考察する機会とし、多くの示唆をいただいた。

四、今後の課題

この二十年余の間、会員の高齢化や多忙化、マンパワー不足も否めず、活動の停滞を感じる時期も度々であった。結成当初の今から二十年ほど前、セミナー等で「医師と間近で話せる」機会は我が地方では希有であったが、医師会や大病院が主催する講座や学習会が増加した昨今、当会ならではのセミナーの存在意義を模索している最中である。近年はあえて「お寺」を会場とし、医療や福祉について考える機会づくりを意識している。同様のテーマでも公共施設やホテル等を会場とした学習会とは趣きが違い、地域に根付いたお寺で人生の終末に思いを馳せつつ、現実的な「いのち」の問題を考えることは意義深いとの声を、講師や参加者からも寄せられた。

また医療や福祉の先にある「葬儀・お墓」に関する相談も少なくない。菩提寺との関係や土地毎の習慣も尊重しながら「セカンドオピニオン」を提供する機会としても、医療・福祉を考える場に僧侶が介在する意義は大きく、同時にまた葬祭や先祖供養の儀式・風習の重要さを再確認する活動でもあると考える。

高齢者施設や病院での活動、グリーフケアや被災地支援でも「傾聴」がキーワードとなる。その語が独り歩きして「じっと相手の話を聴く」ということにとらわれ過ぎて思考停止を招いてはいないかと、自戒の念を込めて一抹の不安を抱く時もある。どうしようもない苦悩や悲嘆と向き合うことも多いとはいえ、相手の困難な状況を少しでも改善するためのアンテナを働かせること、創意工夫を忘れてはいけないのではないだろうか。

「僧衣で病院に」、今なお社会のコンセンサスを得られていない点にはもどかしさを禁じ得ないものの、病院や高齢者施設には宗教的ニーズが確実に存在すると感じている。それらを可能な限り受け止めつつ、今後の活動をより充実させていく所存である。